



自分の生き方でいい。

FWN(フロンティア・ウィメンズ・ネットワーク)交流会 会長 大野智代



先日テレビで、アジアのどこかの奥地で、鳥を弓矢で射て、魚を手づかみで捕り、ほとんど裸に近い恰好で暮らしているような家族が、日本に来て日本の家族と数日を過ごすという番組があった。電車を見て目を丸くするお父さん、ガスコンロを見て「危ない!」というお母さん、色とりどりのペンで絵を描いて喜ぶ息子、甘いものと言えさとうきびしか食べたことがなく、初めてのケーキに喜ぶ娘…。はじめは驚く姿をおもしろく見ていたが、その二つの家族の暮らしの余りの違いに考えさせられることがあった。

自分自身、20年ほど前、オーストラリアで1年弱過ごしたとき、ごくわずかな家具と電気製品があれば、あとはトランク2個分くらいの荷物で十分楽しく暮らせることがわかり、日本に帰ったら、もっとシンプルに暮らそうと思ったものだ。それなのに、日本に帰ってきたら、いらぬものまで買ってしまい、どんどんモノが増えてしまった。

日本に住んでいると、朝起きてご飯を食べ、会社や学校へ行く。そんな生活が当たり前だと思っているから、会社や団体などの組織に属していないと不安だったり、昼間からぶらぶらしている人を色眼鏡で見たりする。今時、携帯やパソコンを持ってないと、「え?」と思われることも…。しかし、世界に目を向けると、本当に多様な暮らし方をしている人たちがいて、日本より経済的にはずっと貧しいのに、幸せを感じている人が多い国もある。

そもそも会社はなんのためにあるのか。会社というのは、家族、社員や社員の家族、お客さんや業者さん、そして地域全体が豊かに幸せになるために作られたものだったはず。しかし、今その会社の中で、日々人間関係や業績の悪化に苦しみ、

ストレスを感じ続けて、うつ病になってしまったり、自殺をしてしまう人などが数多くいる。

経営していると、「会社が命」だから、本当に命がけで働く。私もそうだった。でも本当に死んでしまっただけは何にもならない。そんなに苦しいのならいっそのこと会社をやめる、ゼロから出直す。全く別のことをしてみる。そんな発想があってもいい。世の中にはいろんな人がいる。本当に自分らしい人生ってなんだろうと、よく考えてみることだ。世間体さえ気にしなければ、何でもできる。と、私は自分自身に言い聞かせた。

私は、仕事を通して社会の一人でも多くの人に幸せになってもらいたい、という強い思いで仕事をしてきたし、会社を経営してきた。しかし、結局目の前で仕事をしている社員の中に幸せでない人がいることに気づいていなかった。私はつまづいて会社を辞めることになったけれど、辞めたから気づけたこともたくさんある。これからどう生きるかまだわからないけれど、人にはいったい何が本当に必要なのか、そんなことを考えながら、いろんな生き方、暮らし方があることを若い人に示していけたらと思う。

プロフィール

1979年～ (財)大阪府青少年活動財団

1982年～ 一般企業勤務を経て日本語教師に

1989年～ オーストラリア留学・

日本語学校勤務

1996～2012年 株式会社 宣成社

大阪府キャンプ協会 専門委員

NPO法人ナック 理事 他